



Q11 「音楽を形づくっている要素」を知覚・感受できるようにするためには、どのようにしたらよいですか。

A 音楽科の学習において、「音楽を形づくっている要素」を知覚・感受の支えとして生徒自ら音や音楽を捉えていくことは、とても大切なことです。そのためには、教師が教材として使用する楽曲の特徴に関わる音楽を形づくっている要素について、欲張らずに適切に選択することがポイントです。

まず、「知覚」と「感受」について理解しましょう。

知覚（聴き取ったこと）
 聴覚を中心とした感覚器官を通して音や音楽を判別し、意識すること。

感受（感じ取ったこと）
 音や音楽の特質や雰囲気などを感じ、受け入れること。

【中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 音楽編 p.32 を基に作成】

生徒は、音や音楽を聴いて、知覚・感受したことを言葉や文章で言い表したり書き表したりすることに難しさを感じることがあります。生徒が、音や音楽を聴いて知覚・感受したことを、教師が、意味付けや価値付けをすることがとても大切です。このような学習の積み重ねによって、音楽を形づくっている要素の概念的な捉えが習得されていきます。それと同時に、「音楽のことば」を獲得することにもつながっていきます。

◆意味付けや価値付けのイメージ

この音楽は優しい感じがします。

ちょうどいくらいの大きさと演奏されていたところですか。

散歩をしているようなゆったりとした速度で演奏されています。

うーん...リコーダーに似ているような音がするので、木管楽器で演奏されているように聞こえます。

優しい音楽に感じたのは、聴きやすい強弱、ゆったりとした速度、木管楽器であるフルートで演奏されていることが関係していることが分かりました！

優しいと感じたのは、音楽のどのようなところですか？

ちょうどいくらいの大きさは、*mf*や*mp*などの聴きやすい強弱で演奏されていたということですね。では、**速度**はどうですか？

*Andante*で演奏されていますね。どのような楽器で演奏されているか分かりますか？

そのとおり！木管楽器であるフルートで演奏されています。木の温かみを感じる音色ですね。

また、生徒が音や音楽を聴いて知覚・感受し、知覚したことと感受したこととの関わりについて理解したり考えたりする際には、ワークシートなどを工夫するとよいでしょう。以下に示したワークシートはその一例です。

♪組曲「展覧会の絵」より ムソルグスキー作曲/ラヴェル編曲（第3学年 鑑賞）ワークシートの例

♪4曲の「プロムナード」はどのような音楽でしたか。
それは音楽のどのようなところから感じましたか。

	どのような感じの音楽？	音楽のどのようなところから？	
1曲目	<ul style="list-style-type: none"> ・壮大 ・明るく華やか ・メリハリがある ・縦と横の音楽 	<ul style="list-style-type: none"> ・金管楽器と弦楽器と木管楽器 ・重厚感あるハーモニー ・長調 (変ロ長調 b2) ・拍子がどんどん変わっていく = 変拍子 (5拍子 → 6拍子) 	<p>知覚</p> <p>音色</p> <p>強弱</p>
2曲目	<ul style="list-style-type: none"> ・おどろか ・落ちついた ・かわいらしい ・式典 (君が代と似て?) 	<ul style="list-style-type: none"> ・Hr + 木管楽器 (Fl, ob, cl...) ・移調 (変イ長調) ... b4 ・同じ旋律の反復 (違う楽器) ・音か (強弱) → 120pp 	<p>旋律</p>
3曲目	<ul style="list-style-type: none"> ・華やか ・力強い ・1曲目に似ている ・メリハリ 	<ul style="list-style-type: none"> ・弦楽器 + 金管楽器, 木管楽器 ・1-7 (急 = 静かに123) ・強弱 f ・楽器の数は1曲目より少ない 	<p>又旋律の対比的に重なる</p>
4曲目	<ul style="list-style-type: none"> ・静か ・美しい ・暗い 	<ul style="list-style-type: none"> ・大調調 (二短) ・変拍子 → (4拍子) と (3拍子) が変わっていく ・音域の違う楽器 対比的に 旋律の対比 ・120pp 高音域 → 低音域へ移行 	

ワークシートに記入する際には、自分の考えは鉛筆で、友達の考えは青で、教師の説明などは赤で、など、色を分けて記入するようにすると、学習を積み重ねることによる変容を見取ることができます。知覚・感受することができるようになると、当然、青で記入する量が少なくなります。教師だけではなく、生徒も自身の変容について可視化できますので、主体的な学びにつながる効果もあると考えられます。



A plus



発問を工夫することもポイントです。生徒が音や音楽を聴いてどのように知覚・感受したかについて、「どのような音楽に感じましたか？」と尋ねることが一般的でしょう。生徒によっては、何を答えたらよいのか難しく感じることもありますので、以下に示した発問の例を加えるのもポイントです。

